

第2章

女性の就労と社会関係

——バングラデシュ縫製労働者の実態調査から——

はじめに

バングラデシュの女性は、従来カーテンの向こう側に隠れた存在であった。そのカーテンとは、経済的に勘定される生産力の範疇の境界線であり、また社会的に独立した人格として尊重される範囲の境界線でもあった。家屋の物陰から、サリーの裾で頭、顔を隠しながら外の動静をうかがっている、それがバングラデシュの女性のごく一般的なイメージ像であった。しかし今、目を転ずれば、都会の朝の通勤ラッシュの喧噪のなか、そして夕刻の闇が落ちる頃、片手には弁当箱をいれたポリ袋を下げ、通勤の波に加わる女性たちがいる。縫製工場で働く女性たちである。

バングラデシュにおける輸出向け縫製産業の歴史はきわめて新しい。しかし、1982年に最初の大規模な工場がつくられてから約5年のうちに伝統産品であるジュートを凌いで輸出のトップにおどりでた。そして80年代後半から90年代前半の好調な輸出の牽引車として、同国の経済に新たな展望を切り開いたのである。現在およそ1800社の縫製工場は、すべて首都ダッカと第2の都市チッタゴンに集中している。そこで働く従業員は約80万人、そのうち女性の占める割合はおよそ7割にのぼると推定される。

従来、バングラデシュの女性は、宗教および伝統的な価値観のもとで、様々な行動の制約を受けているといわれてきた。なかでも、とくに名高いのがバ

ルダと呼ばれる規範である。バルダとは一言でいえば、女性隔離の慣習である。女性の世界を家庭に限定するバルダに対し、女性が戸外で就労することは真っ向から対立する。また、バルダはステイタス・シンボルでもある。バルダを守っているか否かが、女性およびその家族に対する社会的な評価の重要な根拠となる。このような社会風土のなかで、働く女性はどのような位置づけを与えられているのだろうか。女性は経済的な地位を手に入れるかわりに、社会的な地位を犠牲にしなければならないのだろうか。また、このような現実の矛盾は、バングラデシュ社会のなかでどのような影響を及ぼし、また処理されているのだろうか。これが本章のモチーフである。

具体的には、縫製産業という新しい雇用場が、そこで働く女性ならびに女性をとりまく社会にどのような影響を与えたかを検討する。まず第1節でバングラデシュの女性がおかれている社会経済環境を概観した後、女性の就労が経済的、社会的にどのような位置づけを与えられているかを第2節で論ずる。続く第3節で、縫製工場で働く女性についての実態調査から、彼女たちの社会経済的なバックグラウンドを紹介する。第4節では、縫製工場での就労が、そこで働く女性の地位にどのようなインパクトを与えたかを検討する。最後に、バングラデシュにおける女性の職業とその社会的な評価について、簡単な概念化を試みて結びとしたい。

第1節 女性をとりまく社会経済環境

バングラデシュの女性の役割は、家族のなかでの人間関係の相対性で位置づけられてきた。人生のライフサイクルのなかで、誰その娘、妻、母と呼ばれ、その呼び名が変わっても、いずれも男性からみた場合の相対的な役割にはかならない。女性が性中立的な家計の担い手として、また家庭の外における職業人、あるいは社会のなかの独立した個人として見なされることはほとんどなかったといってよい。その誕生の瞬間から、女兒は男児が受けられ

表1 男女別の就学生徒数(1991/92年度)

(単位: 万人, かつこ内%)

	男 性	女 性	全 体
初等教育	747.2(54.5)	624.5(45.5)	1,371.7(100.0)
中等教育	248.0(61.9)	152.9(38.1)	400.9(100.0)
高等教育	64.5(71.2)	26.1(28.8)	90.6(100.0)

(注) バングラデシュの教育制度は初等教育(5～9歳), 中等教育(10～14歳), 高等教育(15～24歳)となっている。

(出所) Bangladesh Bureau of Statistics(BBS), *Statistical Yearbook of Bangladesh 1993*, April 1994, Table 12.02, 12.13, 12.27, 12.42より算出。

表2 性別, 居住地別の学校参加率(1981年)

(%)

	初等教育	中等教育	高等教育 (15～19歳)	高等教育 (20～24歳)
全国全体	22.5	33.3	17.0	7.0
男性	24.7	37.9	25.4	12.2
女性	20.2	28.1	8.3	2.3
都市全体	31.6	44.8	27.1	13.2
男性	33.4	47.7	32.4	18.3
女性	29.7	41.5	20.8	6.5
農村全体	22.1	31.3	14.9	5.5
男性	23.4	36.1	23.9	10.4
女性	18.8	25.6	6.0	1.5

(注) 参加率は当該年齢にあたる男女総数に対し, センサス実施期間に学校に出席していたものの割合。就学率とは異なる。

(出所) 表1に同じ, Table 12.57。

る祝福を望むことができない⁽¹⁾。出発点から女子は忍耐と犠牲という二つの価値観を学び成長することになる。男性は家族の資産であり, 女性は負債であるという二分法は性別のみを根拠として, 女性の生涯を司るのである。

女性の相対的な地位の低さを端的に示す指標は, 教育水準および保健面における男女差であろう。1992年の値によれば, 国民全体の識字率は37%と世界でも低い水準にあるが, 男性の49%に対して, 女性は23%と男性の半分以下にとどまっている⁽²⁾。表1は性別の就学者数, 表2は学校に出席している

ものが当該年齢層の男女のなかで占める比率を示したものである。

男女別の就学者数および参加率から、教育における女子の参加の遅れが読みとれるだろう。男女格差は都市部よりも農村部で大きく、また教育水準が高くなれば高くなるほどその差が拡大する傾向も示されている。さらにドロップアウトの割合も女子は男子に比べると高く、かつ早い時期にそれが生じている⁽³⁾。政府は「2000年までにすべての人に教育を」を標語に初等教育の普遍化を重視し、1990年からは初等教育が義務化された。とくに女子の教育水準を高めるため、最近では94/95年度の予算案に、6年生から10年生の女子生徒に対し授業料免除・奨学金付与措置を段階的に進める計画が盛り込まれた⁽⁴⁾。これらの努力の結果、女子の就学率は年々増加の傾向にあるが、男子に比べるとまだまだ教育の普及が遅れているというのが現実である。

なぜ女性の就学が進まないのか、いくつかの理由があげられる。第1に両親の教育に対する無理解、とくに女子はいずれ嫁いってしまうものとの認識から、教育を受けることは無用だという考えが広く浸透している。大多数の女子は思春期に達するやいなや学校をやめ、結婚がまず最大の目的となる。また、それは子供のなかの優先度がまず男子にあり、女子は二の次であるという家庭のなかでの序列を意味する。女子は幼いときから家事の分担を課され、学校へ通うことよりも実働が重視される。第2に、後述するバルダが、女子の行動を大きく制約している。それと関連して、男女別学の学校が少ないこと、女性教員が少ないこと、通学途上の女子の安全を確保できる手段、環境が欠けていることなどが指摘できる。こうした種々の問題が、女子の就学を妨げているのであるが、貧困、さらにそこから派生する貧困の文化さらに伝統的な社会モラルが問題の根底にあることは自明であろう。事実、経済的に余裕がでてくれば、女子教育は一種の社会的ステイタスと見なされるようになるのである。

次に人口動態から女性の地位を探ってみよう。1991年センサスにおける男女比(女性100人に対する男性の数)は106.1と、女性の数が少ないことがわかる。この現象は1901年のセンサス以来ずっと続いている。また年齢別にみても、

81年センサス時において男女比は、15～24歳の年齢層を例外として、すべての年齢層で女性の数が男性を下回っていた。男女比は60歳以上の場合に128と最も大きく、次いで45～59歳が121となっている。言い換えれば女性は男性よりも早く死亡するのである。出生時における平均余命は、男性の56.6歳に対して女性は55.5歳となっている⁽⁵⁾。女性の平均余命の低さは、乳幼児期ならびに成人期の死亡率の高さによるものである。5歳に至るまで女性の平均余命は男性よりも低いが、5歳から19歳までの間はそれが逆転する。さらに20歳から39歳の出産、育児といった再生産に携わる年齢層の女性の平均余命が男性よりも低いことも注目すべきであろう。その後再び女性の平均余命が男性を超え、70歳以上の段階で最終的に低下する。

ここから読みとれるのは、乳幼児期ならびに出産、育児期の女性に対するケアが同年齢層の男性の待遇に比べて、相当に劣っているという事実であろう。乳児死亡率をとってみても、産後1カ月未満の乳児の場合、先進国同様、女児の生き残るチャンスは男児よりも高い。しかし1カ月から11カ月の乳児の場合、女児の死亡率は男児に比べてずっと高くなるのである⁽⁶⁾。成人女性の死亡率の高さについては、栄養不良⁽⁷⁾のほかに、度重なる出産、産褥時の感染、パルダゆえに家庭の外にある医療サービスへのアクセスがはばまれるといった理由も指摘できる。

教育および保健といった基本的ニーズに関わる分野に端的に表れている女性の地位の低さの原因について、大方の見解は一致している。パルダ、宗教、そして前者二つに起因する、女性の生産手段に対するコントロールの欠如である。

1. パルダ

パルダ (purdah) とは文字どおりには「カーテン」あるいは「ベール」を意味する⁽⁸⁾。そこから転じて、南アジアにおける女性隔離の慣習を指す言葉として使われるようになった⁽⁹⁾。すなわち、女性はゼナーナ (zenana) と呼

ばれる女性のための居住空間に住み、戸外へ出ず、他人と接触する場に出ざるをえないときにはブルカ (burkha) と呼ばれる一種のガウンをサリーの上に羽織って顔から踝までを隠すことが望ましいとされる。そのような具象的な行動のあり方にとどまらず、パルダは謙譲、恥じらい、臆病といった価値基準を女性の理想像として内在化させたものである⁽¹⁰⁾。こうしたパルダの外的、内的規範こそが、女性の地位向上を妨げる最も大きな障害であると、これまで一般にいわれてきた。

パルダの起源については必ずしも明らかではない。一つの見方は、イスラムの教義にその根拠を求める。チョードリおよびアーメドは、「(女性の信者は)目を伏せて隠し所を守り、露出している部分のほかは、わが身の飾りとなるところをあらわしてはならない。顔をおいを胸もとまで垂らせ」、「男は女より優位にある。というのは、神がおたがいのあいだに優劣をつけたもうたからであり、また男が金をだすからである。それゆえ善良な女は従順であり、神が守りたもうたものを留守中も守るものだ」と語るコーランの教義にその源があると述べる⁽¹¹⁾。さらにこのような教えの背景には、性的な無秩序をさけるための予防的知恵があるという原の分析⁽¹²⁾は、モロッコ出身の著名な社会学者メルニッシの主張に通ずるものである。メルニッシは、フロイドの分析に凝縮された西洋文明との対比のなかで、イスラム文明は女性のセクシュアリティをより建設的なエネルギーとして捉えると同時に、その圧倒的な力をもつ女性を破壊、無秩序のシンボルと恐れ、性のエネルギーを文明の発展に振り向けるための装置の一つが男女隔離であると説明づける⁽¹³⁾。

第2の見解は、パルダがイスラムに付随するという説に反対する。チャクラバルティは、インドにおけるパルダの萌芽は、イスラムの到達以前にすでにあったと述べる⁽¹⁴⁾。リグ・ヴェーダの時代より、女性は家庭と関連づけられるようになった。それは、当時の牧畜経済に基盤をおく生産様式のなかで、戦いに忙しかった男性に対し、家畜の飼育、管理を担ったのが女性だったためである。それゆえに女性の地位も後の時代に比べると高かった。ヴェーダ後期になると、様相が一変した。なかでも重要なのは、土地の私有制とカー

ストの形成であった。カースト維持のための純血の保持や、父系的な土地相続のためには、女性＝妻に対する完全な男性の支配が必要とされたためである。ここからパルダの文化が生まれたとチャクラバルティは主張している。

パルダの起源について、これ以上深く立ち入る余地はないが、ここで重視したいのは、バングラデシュにおいて、パルダは今なお女性を律する規範として厳然と存在していることである。パルダの遵守は名誉 (izzat) あるいは恥 (lojja) という価値判断と結びつき、女性ならびにその女性を含む家族のステイタス・シンボルとなっている。パルダは、ムスリムに対してより強力に働いているが、国民の9割近くがムスリムであるバングラデシュにおいては、ヒンドゥー教徒に対しても社会的なモラルとして作用している。

2. 宗教

パルダが宗教によってもたらされた概念か否かという議論はひとまず棚上げするとしても、宗教はそれに基づく法体系を通じて、女性の地位に大きな影響を与えている。

バングラデシュの憲法は、第28条および29条で性別による差別を禁じている。そのうえで国会をはじめとする公的機関での女性に対する特別枠の確保、刑法、労働法における女性に対する優遇措置といった特別な保護措置を設けることが定められている。ところが、女性の生活に最も大きく関わる分野である結婚、離婚、子女の扶養、相続といった分野を統括するのは宗教法に基づく個人法であり、憲法が定める男女同権は有名無実にすぎない。

相続を例にとるならば、ムスリム法によれば、女子の取り分は男子の半分と定められており、男子がいない場合には、そのシェアは父系の親族に与えられることになる。また配偶者の遺産相続の場合、妻は子供がいる場合には8分の1、いない場合には4分の1の権利を与えられるのに対し、夫が妻の財産を相続する場合には、それぞれ4分の1、2分の1と、妻のケースの倍の割合で認められている。しかし実際には、女性が相続の権利を行使するこ

表3 労働人口の推移

(単位: 100万人)

	1961	1974	1981	1983/84	1984/85	1985/86	1989
全 体	16.9	21.9	25.9	28.5	29.5	30.9	50.7
男 性	16.1	21.0	24.4	26.0	26.8	29.7	29.7
女 性	0.8	0.9	1.5	2.5	2.7	3.2	21.0

(出所) BBS, *Report on Labour Force Survey 1984-85*, 1988, p. IX および1989, Table 5.2より作成。

とはまれであるといわれる。女性は親の死後も実家を訪れる (naior) 権利と遺産の相続分を交換する風習がある。相続を主張することによって、実の兄弟との関係悪化のリスクをかけるよりも、相続を放棄し、社会的な紐帯を保つほうが得策と考えられるためである。

女性の物理的、精神的な行動を規制するパルダ、そして法律および倫理的な社会の「秩序」の枠組みを提示する宗教のあり方は、女性の生産手段の所有を制約しつつ、家の内外での男性の優位を支えているのである。次節では、このような社会経済的状況のなかで、女性の就労が、どのように位置づけられているかを検討する。

第2節 バングラデシュにおける女性の就労

まず公式統計から女性の就労状況をみることにしよう。1989年労働力調査⁰⁵によれば、労働人口は全体で5070万人で、そのうち女性は2100万人と約4割を占める。労働参加率は全体の46.9%、男性の53.1%に対して女性の場合40.2%となっている。女性の労働市場への参加は近年急速な伸びを示している。前回85/86年度の調査ではわずか320万人にすぎなかった女性労働人口が、2100万人まで増加したのは、第1に就労の定義が変更され、家畜の飼育、養鶏、脱穀、食物加工・貯蔵といった活動が、就労として統計に加えられたことが大きい⁰⁶。これらの活動は、89年の女性労働者数2100万人のうち1710

万人を占めている。

女性の労働参加の変化をみてみよう（表3）。定義の変更の影響を避けるために、1985/86年度までの年次増加率をみると、74年から85/86年度までの女性の労働力増加率は10.6%と、全体の2.9%、男性の2.3%を大きく上回っている。さらに、独立以前の61年から74年までの増加率が0.8%と低かったことに照らし合わせると、女性の就労は独立以後急速に増加したといえることができる。しかし、85/86年度の時点でも女性労働力は全体の10%ときわめて低いシェアにとどまっている。

1974年から85/86年度までの女性の年平均労働人口増加率は、都市部の14.9%に対して農村部が9.8%と、女性の新規雇用は都市が提供してきたことが示されている⁽¹⁷⁾。女性の労働参加率をみても85/86年度には都市部が15.6%、農村部9.1%と、それまでは都市が農村を上回っていたのに対して、定義変更後の89年には、都市部29.4%、農村部69.6%と大きく逆転している⁽¹⁸⁾。しかし、これは先ほどから述べているように定義の変化によるものであり、農村で急激に雇用が増えたという意味ではない。実際のところ、農村部での女性の雇用は、従来労働とは見なされてこなかった種類のものであり、また報酬を伴わないものがほとんどであるという点で⁽¹⁹⁾、都市部での就労とはその意味が大きく異なる。

表4は業種別の雇用状況を示している。女性の就労は農業に大きく依存していることがわかる。また男性と比較して明らかなのは、第三次産業における雇用のシェアが少ないことである。製造業で働く女性は全体の2割と、男性の8.5%に比べるとかなり高い。

女性の参入度の高い業種の性質からもうかがえるように、女性の雇用は農村部に集中しており、農村での就業は女性の労働人口全体のうち93%と、男性の場合（86%）よりも高い。以下では、農村部と都市部という異なる社会経済環境において女性の就労がいかなる実態をもっているのか、より具体的にみていくことにしよう。

表 4 業種別雇用状況(1989年)

(%)

	全体	男性	女性
農林漁業	64.9	60.3	71.5
鉱業	0.2	0.3	—
製造業	13.9	8.5	21.6
電気・ガス・水道	—	—	—
建設	1.3	2.1	0.2
商業・ホテル・レストラン	8.2	13.3	1.1
運輸・通信	2.5	4.3	—
金融・ビジネスサービス	0.5	0.8	—
共同・個人サービス	3.6	5.5	0.9
家事労働セクター	3.2	3.1	3.3
その他	1.6	1.8	1.3
全業種	100.0	100.0	100.0

(出所) BBS, *Report on Labour Force Survey 1989*, 1992, Table 6.6.

1. 農村における女性の就労

1960年代の半ばまでは、農村女性の賃労働市場への参加は非常に限られていた。その後、71年の独立戦争は、多数の国民の家屋、家畜などあらゆる資産や生産手段を破壊したが、同時に多くの女性にとっては、夫、父親、兄弟という頼るべき家計の担い手の喪失をも意味した。さらに74年の飢饉をはじめとする頻繁な自然災害も家計の困窮の度合いを進め、女性を労働市場に誘う契機となった。このような女性を含めた貧困層に対する福祉政策として、政府ならびに外国援助機関や NGO により、様々な生活向上のためのプロジェクトが始められたのも70年代のことである。以降、男性の領域であった戸外に出て、就労を求める女性の数は急激に増加した。

農村部における女性の労働については、これまでに多くの調査がなされている。これらの研究成果にみられる代表的な主張は、「経済的」、「生産的」労働という従来の定義では、女性の活動が正当に把握されないという反論であろう。例えば、ファルークは生産活動の定義を、所得獲得、支出削減およ

表5 農村女性の労働内容

家庭内活動		収入向上活動	
家事	自家消費費用作物の収穫後処理	家庭内	家庭外
料理	米の煮沸	マット作り	他人のための収穫後処理
水くみ	脱穀	食物加工	土木工事への参加
燃料採集	乾燥	キルト作り	煉瓦工場での労働
育児	精米精選	生糸紬ぎ	家族計画に関する仕事
掃除	貯蔵	小商いの用穀加工	NGO ワーカー
家庭菜園	種子選別	衣服縫製	ユニオン議会議員
家禽の世話	スパイス碎き		産婆
食物加工			
マット作り			

(出所) Zarina Rahman Khan, *Women, Work and Values: Contradictions in the Prevailing Notions and the Realities of Women's Lives in Rural Bangladesh*, Dhaka: Centre for Social Studies, 1992, p. 89.

び家事という三つの分野を含める範囲に捉え直したうえで、女性は日に12時間から14時間も労働していると述べる²⁰⁾。しかし、本章は労働の再定義を目的としているわけではない。むしろ、労働の実態を確認することが必要である。そのため、原点に帰って女性の労働の種類を家庭の内と外、収入の有無という二つのカテゴリーで細分化してみる。そのうえで、伝統的な女性の役割からの逸脱である、家庭の外における賃労働の内容に注目し、そこに従事する女性がいかなる動機を有しているのかを検討することにしよう。

表5は、1980年代初頭のマニクガンジ県の村で観察された女性の労働の内容である。その種類は農業依存の高い生産システムを反映してあまり多くはない。女性が参加できる労働にはいくつかの特徴がみてとれるだろう。第1に、中心は農産物の加工に関するものである。ただし実際の農作業に従事しているものは1人もいない²¹⁾。第2に、賃労働についてみても、その多くが家庭内での、そして家庭外でも「女性の仕事」の延長線上にあると判断される職業の範囲にとどまっていることである。政府あるいはNGOによって実施されている貧困者救済措置の一環としての土木工事においても、現場での作業は男女別に分けてやるといった配慮が、雇用者側にあるのが普通である。

表6 階層別の就労者数

(単位: 戸数, かつこ内%)

階層区分	農村全体	サンプル	家庭内	家庭外	合 計
土地無し	69(41)	25(42)	8(47)	10(63)	18(55)
零 細	58(35)	14(23)	7(41)	4(25)	11(33)
中 規 模	34(20)	15(25)	2(12)	0(0)	2(6)
富 裕	6(4)	6(10)	0(0)	2(12)	2(6)
合 計	167(100)	60(100)	17(100)	16(100)	33(100)

(注) 就労者数は、収入向上活動に従事する女性のいる戸数を意味する。

(出所) 表5に同じ, p. 59およびp. 93。

第3の特徴は、女性に対して開かれている賃労働が二極分解していることである。それぞれの職業の賃金を示すデータがないので、一般的な傾向から推測せざるをえないが、土木工事、穀物加工といった低賃金、低資格そして季節変動の大きい職業がある一方で、村議会の議員、家族計画ワーカーといった安定的な所得、ステイタスを享受できる職業がある。数のうえでは前者が圧倒的な大多数を占めている。

こうした様々な労働をすべての女性が一律に行っているわけではない。まず、狭義では「家事」に含まれる家庭内の活動をみると、家庭内での家事労働は、当然のことながら世帯の経済力（土地保有面積）の大小にかかわらず、ほぼすべての女性がそれに従事している。ただし自家消費用作物の収穫後処理に関しては、零細あるいは中間規模の農家の女性は大多数がそれに従事しているのに対して、処理する穀物をもたない土地無し層の女性が最も少なく、また自らが手を染める必要のない富裕農家の女性がそれに次いで少ない²²⁾。

他方で、所得に直結する賃労働に従事している女性の比率は、サンプル60人中33人と半数を超えていた。うち家庭内での労働が17人、家庭外は16人である（表6）。

女性の労働市場への参入、とりわけ家庭外での就労が、経済的必要性により余儀なくされているという傾向は、表6からもみてとれる。すなわち賃金、給与労働をしている女性全体の9割近くが土地無しおよび零細農家の女性に

よって占められている。そのなかでも家庭外での就労では土地無し女性の集中が顕著にみられる。逆にミドルクラスの女性、および富裕層の女性の就労は少ない。家庭外で就業している富裕層の女性2人は、ユニオン（行政村）議会議員そして家族計画普及員という、いずれも社会的に評価の高い職業に就いている。タンガイル県ならびにフォリドプール県での調査でも、賃労働に参加している女性はそのほとんどが土地無し世帯の出身であった。また同調査では、賃労働に参加する女性の年齢が20歳から40歳に集中していること、さらに全体の6割近くを占める既婚者に加え、離婚、別居、死別した女性の割合も30%と高いことが明らかにされている²³⁾。

職業の特色からうかがえるように、農村女性の賃労働のほとんどは臨時雇いのインフォーマルな性格のものである。先述のタンガイル、フォリドプール両県での調査では、平均就労日数は140日、また完全雇用水準（280標準労働日数）に達しているものは、全体の7.5%にすぎず、半失業の割合は50%にのぼっていた²⁴⁾。このような労働の対価は現金で支払われることは少なく、現物あるいは食事のみという場合も多い。現物および食事を当該地域の市場価格で換算してみると、女性の標準労働日1日当たりの平均賃金は、同地域の男性労働者の4割にも満たない²⁵⁾。このような賃金の男女格差は、潜在的な失業率の高さにもみられるとおり、雇用を求める女性の数と女性に対して提供される労働の需給バランスの不均衡を背景としている。食事のみの支給といったきわめて悪条件のもとでも、少しでも生活の糧をとという女性は跡を絶たない。一食しか口にできない日も少なくない困窮にあえぐ女性にとっては、ほかのオールタナティブは存在しないからである²⁶⁾。

2. 都市における女性の就労

バングラデシュの都市化率（総人口に占める都市居住者人口の比）は18%（1992年）と、世界でも、また南アジア域内の近隣諸国と比べてもまだ低い水準にある²⁷⁾。しかし、1950年代半ば以降都市人口は急増しつつある。なかでも首

表7 都市の有学歴女性の職種

	教職	事務	医師	看護婦	実業	ジャーナリズム	その他	合計
人数	70	90	10	20	4	2	4	200

(出所) Mahmuda Islam, "Women at Work in Bangladesh: A Sample Survey of Working Women," in Women for Women Research and Study Group, *Women for Women: Bangladesh 1975*, University Press, 1975, p.95.

都ダッカの首座性が際立っている。パキスタン時代までは、ダッカはどちらかといえば行政の中心として、港を擁する商工業都市チッタゴンとの間に機能の分散がみられた。しかし独立以降の管理経済体制のなかで首都ダッカへの企業集中が進んだ。企業の成功不成功を決める要因として、原料あるいは市場へのアクセスといった地理的な至便性よりも、行政の中核への近接性のほうがより大きな影響を及ぼすような経済社会制度が培われていたためである。後に詳しく述べる縫製産業の場合も、原材料の輸入、製品の輸出の窓口はチッタゴンであり、かつチッタゴン、ダッカ間の交通も決してスムーズとはいえないにもかかわらず、ダッカにより多くの企業が集中している。したがって、今後都市といった場合、おもにダッカを念頭において論を進めたい。

都市における女性の就労に関する既存研究は数少ない。1970年代半ばに行われたある調査は、10年以上の教育を受けたダッカの勤労女性200人の社会経済的な帰属と就労に対する意識を探っている²⁸⁾。

表7には、女性の職業のなかで、教職、事務、医療関係が圧倒的な大多数を占めていることが示されている。「事務」という範疇のなかには、政府ならびに民間の機関におけるオフィサーから、セクレタリー、電話交換手など幅広い職種を含んでおり、単独で、最も多いのは教職に就く女性の数である。この背景には、パルダ社会のなかで、異性との接触を最小限にとどめることが可能な職業として、かつ女子教育機関での女性教員の必要性という社会的な需要からも望ましい職場として教員があることがあげられている²⁹⁾。

年齢構成をみると、サンプル全体の45%にあたる90人が21歳から30歳の間であった。31歳から40歳、41歳から50歳、20歳以下の年齢層がこれについて

いる。また過半数以上にのぼる134人が寡婦を含めた既婚者であった。別の調査でも都市の勤労女性の7割以上が既婚者によって占められていた³⁰⁾。この理由としては、女性にとって独身のまま生涯を過ごすという選択肢はほぼ存在しないということのほか、未婚女性が外で男性と混じって働くということに対する強い社会的な偏見があることが第1に考えられる。また、学業を修了していない若年女子が就ける職業は、収入も社会的な評価も低い職に限られている。したがって、未婚の女子が就労する場合には、世帯の困窮の度合いが相当に大きいとみることができるだろう。

働く女性を輩出するのはどのような社会階層であろうか。彼女たちの父親の職業からそれを見ると、回答のあった140人のうち半数以上にのぼる82人の父親が公務員であった。農業に従事しているものは、わずか16人にすぎない。その他はビジネス、医療、教職、法曹関係がほぼ同じ割合であげられている。これをみるかぎり、働く女性の属する社会階層は、大まかな言い方であるが、相対的に教育程度の高いミドルクラスと結論づけることができるであろう。しかも、その生活および労働の基盤は都市である。しかし、そのような出身階層は、様々な職業グループに応じて大きく異なっている。その違いをやや詳しく眺めてみよう。

まず、彼女たちの属する世帯の所得と、教育水準からみた社会階層と就労の間には、明らかな正の相関関係が認められる。すなわち社会階層が相対的に高い階層の女性がより多く、表7に掲げられたようなフォーマル部門での雇用に従事しているということである。また、階層と職業に付随した所得にも、同様な関係がみられる。電話交換手、看護婦、受付といった、この国では社会的に評価が低く、また所得も低い職業に就いているのは、低所得階層の家庭の女性たちであり、逆に大学の教員や銀行のマネージャー、政府のオフィサー、ジャーナリストなどといった威信も所得も高い職業は、もともと高い所得階層出身の女性らで占められている³¹⁾。さらに、看護婦に代表されるような社会的地位の低い職に就いている女性は、農村部の農家の出身者が多い³²⁾。このような労働市場の分断については後述するが、その性格は、社

会階層間の格差の大きさを反映しきわめて硬直的で、しかも分節化されたグループ間の移動の経路は、ほとんど開かれていない。

一方、前述の調査の対象の枠外にいる、教育を全く、あるいはほとんど受けていない女性たちの就業はどうであろうか。そのような条件下の女性にとって、正規あるいは組織化された部門で雇用を見つけることは非常に難しい。したがってそのほとんどが、インフォーマル・セクターあるいはフォーマル・セクターでも、ヒエラルキーの最底辺の職業に従事している。ダッカのスラムに住む女性の就労に関する調査によれば、4カ所のスラムに住む15歳以上の女性707人のうち、フォーマル・セクターに従事しているものは52人(7.3%)、失業者223人(31.5%)を除いた残りの432人(61.1%)がインフォーマル・セクターに吸収されていた³³⁾。

インフォーマル・セクターと一言にいてもその範囲はきわめて広い。しかし男性と異なり、女性が参入できる職場は限られている。都市の最下層の女性にとって、最も一般的な職業はメイドである。前述の調査によれば、インフォーマル・セクターで働く女性200人のうち、自営(ハンディクラフト製作など)、無給の家内労働を除く156人が賃労働を行っていた。そのうちメイドとして働いているものは106人で、賃金労働者全体の68%に相当する³⁴⁾。24人(15%)が従事している土木工事関連の煉瓦割りをあわせると、この二つの職業で女性賃労働者の8割以上を占めている。その他にあげられた職業は、水運び、穀穀ふるい、飲食店での労働、工場労働、清掃などである。

都市における女性の代表的な職業であるメイドは、外国人に雇われた一握りを除けば、労働条件としては決して良いとはいえない。賃金は低く、決まった休みはない。また雇い主の虐待という例は枚挙にいとまがない。しかし、唯一、外とは遮断された「安全」な職場という点が、すでに述べたような、女性にかかる世間の目という特有な負担を軽減するメリットとなっている。

ダッカの人口の急増にともない、住宅をはじめとする建設部門は近年活況を呈している。それとともにこのセクターでの労働需要も急激に増加した。男性よりも低賃金で雇える女性に対しても雇用の機会を提供したが、技術が

なく体力的にも劣る女性は、煉瓦割りのような単純反復作業に従事しているのが一般的である。

いずれの職業においても、女性の雇用、労働条件はきわめて悪い。しかし、他に選択肢をもたない貧困層の女性たちにとっては、いかなる条件であろうとも糊口をしのぐ手段にしがみつかなければならないのである。先にみたスラムの女性の統計でも、全体の30%以上が失業状態にあった。すなわち雇用に対する需要、そして労働予備軍の大きさを物語っている。

都市の最底辺で働く女性の大多数は50歳未満の女性たちである。先述のスラムの調査でも、就労している女性の46%が21歳から30歳の年齢層に属していた。30代、40代、20代がこれに続いており、50歳以上の女性は全体の3.5%にすぎない。また、全体の74%は既婚者である。さらに別居、離婚、寡婦が合わせて24.5%を占める。未婚女性はわずかに1.5%と少なく、経済的困窮下にあっても未婚の女性が就労することは、きわめて例外的なケースとみることができよう⁶⁵⁾。彼女らの9割以上は全く教育を受けていない。初等教育(5年)を修めているのは2%にも満たない⁶⁶⁾。

ダッカのスラムを形成しているのは、大部分が農村からの移住者である。スラムに行きついたものは、農村で生計を立てることができなくなった人々である。スラムの勤労女性200人のうち、91%が農村出身者である⁶⁷⁾。農村からの出稼ぎ男性が人力車引きとなるのが一般的なモデルならば⁶⁸⁾、女性のそれは、すでに述べたとおり他家でのメイドである。しかし男性とは異なり、女性が単身で都市に移住してくることはまずない。夫あるいは親と都市に出てきた女性が、家計を助けるために働くというのが普通である。

以上、農村と都市という異なる社会経済的空間における女性の就労について概観してきた。そこからバングラデシュの女性の雇用の特色をまとめてみよう。まず第1に、職業とそれに携わる女性の社会階層がほぼ固定化していることである。すなわち教員、医師、政府および民間の機関のオフィサーといった職業に就いているのは、教育水準が高く、かつ世帯の所得水準も高い女性たちである。これに対して、対極に位置する、メイドや煉瓦割りといっ

たインフォーマル・セクターに吸収されている女性は、教育を受けておらず、困窮世帯の家庭から出てきている。看護婦、電話交換手といった職は、教育も所得も二極の丁度中間に位置する社会階層と結びついている。農村においても、職業と社会階層の間には、強い相関を見いだすことができる。他家での農産物の収穫後処理や土木工事を行っているのは、全員が土地無しあるいは零細農家の女性である。農村部では都市の看護婦などに相当するような、中間的な仕事がない。

第2の特徴は、中間的な社会階層の就業が、上層ならびに下層の女性の就業に比べると少ないことである。包括的な統計はないので、数のうえでそれを比較することはできないが、例えば、看護婦という職業を例にとってみよう。同じ年次で比較可能な1983年時点のデータによれば、全国の医師（歯科を除く）の数1550人に対して、看護婦の数は630人と、医者1人につき0.4人の看護婦しかいない計算になる⁶⁹。この国において、西洋医学に基づく看護教育が始まったのは47年のインド・パキスタン分離独立直後のことである。当時東パキスタンにわずか50人を数えるばかりであった看護婦を緊急に育成する必要から、看護学校を設立するとともに、女子校に指導教官を派遣し卒業生に対し看護学校へ入学するよう呼びかけたりした⁴⁰。その後、経済的な必要性とともに、寄宿舎があるといった利点もあり、入学する女子は徐々に増加した。しかし、到底需要を満たすほどの数ではない。このような現実の背後には、最も大きな理由として、看護婦という職業に対する社会的な評価の低さがあげられている⁴¹。その根拠は先述したパルダであり、異性と接触せざるをえない職業的な特性に対するものである。

自己実現あるいはより快適なアメニティを求めて就労する、より高い階層の女性と、まさに生存を動機とする貧困層の女性の間にいる中間階層の女性は、いわばジレンマに陥っている。経済的な必要はある程度切実でありながらも、その境界線にあって、就労すること、あるいは職業に付随する社会的な価値観をより強く感じているのである。現職の看護婦が職に就くにあたって、回りからはそれに対する支持よりも反対が大きかったことが調査で明ら

かにされている⁴²⁾。その反対の最も多くは親戚から出されている。また父親のはば2倍の強さで、同じ女性である母親の反対があったのも印象的である。このような社会的な暗黙の規制は、ムスリム女性により強く作用している。先の調査でも、看護婦のなかには人口比では1%に満たないキリスト教徒の比率が30%と高かった。

別の調査でも、女性の就労に対する反対意見が最も多かったのは、中間的な所得グループであったことが観察されている⁴³⁾。このような中間階層の意識のあり方については、1980年代の半ばに農村調査を行ったホワイトが、パルダを最も厳格に遵守しているのが村の中間階層であると述べたことにも合致する⁴⁴⁾。

第3の点は、女性の就労における都市と農村の非連続性である。すでに述べたとおり、都市において所得、社会的地位双方の面で好ましい職業は、そのほとんどが都市に生まれ育った女性によって占められている。一方、農村出身者は底辺の賃金労働者から、上は看護婦、オフィスの補助的事務など幅広く就労しているが、高所得・高ステータスの職業分類への参入は非常に限られている。これは、第1には、都市の高い所得階層出身の女性はより高い教育を受け、またより広範な社会ネットワークを通じて、より良い職を得る可能性が大きいということから生じる当然の結果であろう。またそれ以前の理由として、教育をはじめとする社会的および経済的なインフラが少数の都市に集中しており、しかも人口に対してパイの大きさがあまりにも小さいため、既得権益を得ている社会集団が、それを排他的に分け合うという枠組みが成立していることが指摘できよう。農村から移住してくる女性は、このサークルの外縁で、こぼれてくるパイのかげらを拾うような形で働いているといえるのではないだろうか。

バングラデシュの女性の就労を以上のような文脈で理解したとき、伝統的な女性の職場ではない縫製工場における雇用は、どのように位置づけられるであろうか。次節では、その実態とそこで働く女性労働者の社会経済的な背景を手がかりにその問題を考えてみたい。

第3節 縫製工場の女性労働者

バングラデシュにおける輸出志向型縫製産業の歴史はきわめて新しい。最初の本格的な輸出向けの縫製工場が設立されたのは1982年のことである。この産業の萌芽は、従来の国内市場向けの零細な仕立て屋や、農村の手織機、パキスタン時代から存在する旧態依然とした大規模綿繊維工場とは全く別のところで生まれている。

先鞭は、韓国の代表的な企業グループ大宇が、バングラデシュの一人の企業家ヌルル・カデル・カーンと提携して設立した「デシュ・ガーマンツ」によってつけられた。大宇はそれまでバングラデシュの国鉄に鉄道車両を売却するなど商社として活動していたが、「デシュ」を通じて、本国での経験の蓄積がある縫製産業に乗り出したのである。韓国の縫製産業は周知のとおり、安い人件費を利用して、アメリカ、日本市場に果敢な輸出攻勢をかけてきた。しかし、経済発展が進むにつれて人件費が上昇し、労賃のコストが製品の競争力を決める縫製産業においては、生産基地を海外に求めることが急務となってきたのである。

人件費の安さ以外にも、外国企業が注目したバングラデシュのメリットがあった。それは、1973年以降、国際的な繊維（衣服を含む）貿易を管理してきた国際協定である多国間繊維取り決め（MFA）の存在である。これを提唱したのは、日本、韓国、香港、台湾といった東アジアからの廉価な繊維製品の輸入増加に悩まされていたアメリカである。MFAは、自由貿易を掲げるGATT（関税および貿易に関する一般協定）の例外的な措置として、輸出国に対して規制枠を設けることを認めた。この規制枠による輸出の頭打ちを回避する手段として、当時、規制の対象となっていなかったバングラデシュに生産拠点をシフトする戦略が韓国、香港資本によって取られたのである。

外資の参入は、バングラデシュ側にとっても大きな利点をもたらした。国際市場での販路の確保や、海外からの原材料の調達というバングラデシュの

企業にとって不得手な分野を外資が肩代わりしてくれたからである。加えて、政府の政策も民間資本育成、輸出産業振興に重点を移しており、輸出志向縫製産業に対しては、原材料に対する関税の免除、法人税の免除など様々な優遇策が提供されたことも大きい。「デシュ」の成功を皮切りに、多くの地元企業が次々と縫製工場を設立した。こうしてバングラデシュは国際的な縫製の下請け関係に組み込まれていくことになったのである。登録工場の数は1982/83年度（7月から6月）の21社から94年8月には1857社まで急増した。また82/83年度からおよそ10年の間に、輸出は年に60%という大幅な伸びを示し、86/87年度にはジュートを凌いで最大の輸出品目に成長したのである。

主な製品は、廉価なシャツ、Tシャツ、パンツ、スカート、ジャケットといった大量生産品である。輸出先はアメリカ、ヨーロッパがほとんどを占め、なかでもアメリカはバングラデシュの縫製輸出全体の42%を占めている（1992年）。アメリカにおけるバングラデシュの市場シェアは4.7%で、中国、香港、台湾、ドミニカ、韓国、フィリピンに次ぎ第7位である。

輸出と並んで見落とせないのは、縫製産業がもたらした雇用への影響である。縫製産業に従事しているのは現在およそ80万人といわれる。注目すべきは、その約7割が女性によって担われているということである。なぜ女性か、ということについては、より低賃金で雇える未開拓の潤沢な労働供給源であったという理由と並んで、先鞭をつけたのがバングラデシュの社会慣習には縛られない外資であったという点も看過できないだろう。もちろん、女性の側に雇用に対する大きな需要があったことはいうまでもない。工場はすべてがダッカならびにチッタゴンに集中しており、前節の分類に従えば、完全に都市型の雇用形態に属する。

これまで繰り返し述べてきたように、家庭の外における女性の就労に対して様々な制約要因が働いていたバングラデシュにおいては、このような女性の集団雇用のケースは先例のないことであったといってよい。しかし、この新しい現象はバングラデシュ社会でどう受けとめられたのだろうか。また縫製工場で働いている女性はどのような社会経済的な背景、動機を有している

表8 工場労働者の年齢構成

(%)

年齢(歳)	男 性	女 性	合 計
10～14	2.2	9.9	6.2
15～19	15.1	39.2	27.8
20～24	33.8	26.1	29.7
25～29	30.8	15.0	22.5
30～34	12.4	5.7	8.8
35～39	4.9	3.0	3.9
40以上	0.8	1.2	1.0
合 計	100.0	100.0	100.0
平均(歳)	24.35	20.69	22.42
標準偏差	5.51	5.97	6.04

(出所) 筆者調査 (1994年)。

のであろうか。

筆者がダッカ大学の研究者と共同で行った縫製労働者の実態調査の結果からその点を報告する。調査は1994年、ダッカにある42の縫製工場で働く労働者770人(男性364人、女性406人)に対して実施した⁽⁴⁵⁾。

1. 工場労働者の年齢構成

表8から、縫製工場が若年労働によって支えられていることが明らかである。男女合わせて全体の8割が30歳未満の若年層である。女性労働者の年齢構成は男性よりもさらに低年齢層に偏っており、49%が19歳以下によって占められている。この理由として考えられるのは、第1に、後述するが女性が主に雇われている縫製の現場部門では、採用にあたって学歴は考慮されないこと、経営者からすれば人件費の低い、より若い女性を望む傾向があることが考えられる。また、産業としての歴史の浅さゆえに、従業員の全体の年齢がシニア化していないこと、さらに縫製工場の労働者の離職率が高く、その度に新規雇用による労働者の若返りが繰り返されていることなどが指摘できよう⁽⁴⁶⁾。前節でみた他の職業に就いている女性の年齢構成と比べてみると、

表9 工場労働者の学歴

(%)

学 歴	全体	男性	女性	都市の女性平均
文盲	13.5	4.1	21.9	} 41.9
読み書き可ただし正規の教育は無し	13.1	5.0	20.4	
小学校(5年)	17.7	8.5	25.9	30.1
中学中退(6~9年)	20.8	24.7	17.2	16.7
中学校修了(10年)	17.3	25.0	10.3	} 8.9
高校修了(12年)	11.9	22.5	2.5	
大学	4.2	7.1	1.5	} 2.0
修士以上	1.6	3.0	0.2	
合計	100.0	100.0	100.0	99.6

(注) 都市の女性の平均値については、高等専門学校およびマドラサ(宗教学校)を除いてあるため、合計が100%にはならない。

(出所) 表8に同じ。ただし都市の女性平均に関するデータは、BBS, *Report on Labour Force Survey 1989*, p. 14, Table 4.4.

縫製工場の場合、若年化傾向が一層顕著である。無論、インフォーマル・セクターについては統計で把握することが難しく、児童労働も相当に多いと推測されるが、教師、公務員、看護婦などのフォーマル・セクター部門と比較すれば明らかに縫製工場の労働者の平均年齢は低いと思われる。すなわち、縫製工場は、フォーマル・セクターの雇用から排除された年齢集団をすくい取る役割を果たしているといえることができるだろう。そのことは、労働者の学歴からも裏づけられる。

2. 学歴

縫製工場で働く女性労働者の学歴は低い。全体の42%が全く正規の教育を受けていない(表9)。初等教育のみ(中退も含む)を合わせると7割近くにはなる。縫製工場労働者の学歴水準は、最後のコラムに示した都市の女性全体の学歴水準とはほぼ同一の分布を描いていることがわかる。

他方、男性の学歴は相対的に高い。これは、主として男性と女性の職種ならびにそれに要求される学歴の差を反映したものと考えられる。中間管理職

表10 配偶者の有無

(%)

	男 性	女 性	全 体
既 婚	42.0	48.8	45.6
未 婚	57.7	44.6	50.8
離 婚	0.3	1.5	0.9
別 居	—	4.7	2.5
死 別	—	0.5	0.3
平均結婚年齢(歳)	22.16	17.07	19.29
標準偏差	6.31	4.51	5.93

(出所) 表8に同じ。

的な部門⁽⁴⁷⁾に就いているのはほとんどが男性であり、女性の割合はわずか13%にとどまっている。これに反して現場のオペレーター、縫製ヘルパーの90%以上が女性で占められている。このように女性が集中的に雇用されている職種についてみれば、必要とされるのは実際の技能であり、これはOJT(職場指導)での技能修得が容易なため、学歴は考慮されていない。むしろ、低学歴の若年女子が人件費の面ではより有利であった。

3. 配偶者の有無

女性労働者のうち過半数は既婚者である(表10)。しかし、前節でみた他の職業に従事する女性の一般的な傾向に比べると、縫製工場では未婚の女性の就労比が比較的高いことに気づく。その理由は、経営者側にある。育児、家事などで欠勤、離職の可能性の高い既婚者よりも、タフな労働に耐えられる未婚女性を好むからである。そのため女性労働者のなかには既婚であることを隠す傾向もみられる。

一方、離婚、別居状態にある男性労働者はほとんどいないのに対し、女性労働者の6%以上がそのような境遇にある。離婚、別居は都市および農村の両方で貧困層にしばしばみられる。労働者が掲げた理由は、ダウリ(新婦側から新郎側への婚資)の贈与に関する問題(30.8%)、夫の重婚(23.1%)、夫に

よる暴力（15.4%）などであった。第1節でもふれたが、結婚生活に破れた女性の立場はきわめて弱い。実家に身を寄せることができれば幸いであるが、多くの場合には実家自体が困窮に喘いでいる。そのような自活を余儀なくされる女性に対する救済の一端を縫製工場が担っているといえる。

4. 宗教

われわれの調査では、労働者の宗教に関する設問は含まれていなかった。しかし1989年から90年にかけて行われた別の調査では、縫製工場で働く女性労働者の95%がムスリム、4%がヒンドゥー教徒、残りがキリスト教徒、仏教徒であった⁴⁸。バングラデシュ全体の宗教構成比（ムスリム87%、ヒンドゥー12%、その他1.2%、1981年センサス）と比べると、縫製工場におけるムスリム女性の比率が高いことが明かである。これは、前節で述べた看護婦にムスリム女性の参加が少なかったこととは対照的である。すなわち、縫製工場での労働については、ムスリム女性の側にそれを思いとどまらせるような強力なマイナス要因はないということができよう。

5. 出身地

先にみた、インフォーマル・セクターに従事する労働者と同様に、縫製労働者の大多数は農村からの移住者である。ダッカおよびそれ以外の都市ならびに郊外出身者は、男女合わせたうちの22%にすぎない（表11）。残りの8割近くがダッカ県あるいは他県の農村出身者である。一世代以上ダッカに住んでいるものは、全体の13%を下回っている。

男女別にみると、国内移動のパターンに若干の違いがある。男性に比べると、女性のなかでダッカ出身者の女性の比率は高い。また、男性労働者の場合には単身移動が男性全体の半数以上を占めるが、そういったケースが女性には稀である。むしろ、家族とともにダッカに移住してきたと答えた女性が、

表11 工場労働者の出身地

(%)

	男 性	女 性	全 体
ダッカ市内	7.7	17.2	12.7
他市	3.8	3.7	3.8
ダッカ郊外	5.2	6.2	5.7
ダッカ県内の村部	3.3	6.2	4.8
他県の村部	80.0	66.7	73.0

(出所) 表8に同じ。

農村出身の女性の80%近くを占めた。したがって、農村女性が都市に出て就労する場合には、家族ぐるみの移住がまず前提となり、妻や娘が家計を助けるために働くという形態が一般的であるといえる。

6. 世帯の所得水準

縫製工場の労働者はどのような社会階層に属しているのか、残念ながらわれわれの調査では世帯主の職業に関する設問がないため、住環境および耐久消費財の所有の有無を手掛かりにみていきたい⁽⁴⁹⁾。労働者のうち、持ち家に居住しているものは全体の6.4%にすぎない。借家に住んでいるものが74.5%と大多数を占める。また残りは「メス」と呼ばれる単身者用（男性）の共同生活施設⁽⁵⁰⁾に住んでいる。

しかし、この国の全般的な状況に鑑みるならば、縫製労働者の住環境は必ずしも悪いとはいえない。大部分はセメント塗りの比較的堅牢な建物に住んでおり、また労働者の9割以上が電気および安全な水へのアクセスを確保している。家にガスが供給されているのは66%を占める。これらの生活インフラの賦存状況から判断するかぎり、縫製労働者の生活レベルは平均的な都市生活者より若干恵まれていると結論づけられる⁽⁵¹⁾。またラジオ、テレビ、自転車、オートバイなど耐久消費財の所有に関しても、縫製労働者世帯は平均をやや上回っていた。

サンプル全体の平均世帯所得（月当たり）⁵²は4211.67タカである。これは公式統計でみた都市の平均世帯収入をやや下回っている⁵³。ただし、サンプルのなかでも、女性労働者が最も多く集中しているミシンのオペレーター職に限ってみれば、その世帯平均所得は3439.46タカで、これは都市の所得階層のなかでも最も数の多いコホートに含まれる⁵⁴。したがって、縫製労働者の所得水準は、ほぼ都市の平均に位置しているといえることができる。しかし、男女別にみると、女性労働者の世帯所得は男性労働者のそれよりも低い⁵⁵。それについては、もともとより貧しい世帯がより多くの女性を労働市場に送り出しているということと、男女別の賃金格差が反映されているという2通りの解釈が考えられる。

縫製工場で働く女性の社会階層について、ここで簡単にまとめてみよう。彼女らのほとんどが若年の未婚者であり、また学歴は概して低く、全体の半分近くが正規の学校教育を受けていない。また、彼女たちの出身地をみると、都市で生まれ育ったものは少なく、家族とともに農村から移住してきたものが大多数を占めていた。こうした特徴は、前節で述べたインフォーマル・セクターで働く女性たちと重なる部分が大いことに気づく⁵⁶。そこから、かつてインフォーマル・セクターに滞留していた女性労働力を、縫製工場が吸収した、ということが可能であろうか。事実、縫製工場ができたためにメイドのなり手がなくなったとは、ダッカの住民の間でよくいわれる。無論、そこにはかなりの誇張があるとしても、不安定な状況で働く女性にとって、縫製工場は手が届くところにある「好条件」の就業機会として映ったと思われる⁵⁷。すでにみたように縫製工場労働者世帯の生活水準は、スラムのそれよりはるかに高い。このような違いに女性の就労はどのように貢献したのか、またそれによって女性の立場がどのように変化したのかを次節で述べる。

表12 工場労働者の所得分布(月収)

(%)

所 得	男 性	女 性	全 体
1,000タカ以下	19.5	38.7	29.6
1,001～1,500タカ	23.1	29.3	26.4
1,501～2,000タカ	17.0	16.7	16.9
2,001～3,000タカ	17.6	9.6	13.4
3,001～4,000タカ	8.2	1.7	4.8
4,001～5,000タカ	5.5	1.0	3.1
5,001タカ以上	9.1	3.0	5.8

(注) 平均 2,040.39タカ。
標準偏差 2,136.49タカ。
最低 300.00タカ。
最高 20,000.00タカ。

(出所) 表8に同じ。

第4節 縫製産業が与えた影響

縫製工場労働者の所得分布を男女別に示したのが表12である。

この表から、賃金水準における男女の格差が明らかにうかがえる。1500タカ以下の割合は男性労働者の43%に対し、女性では過半数以上の68%を占めている。また所得3001タカ以上の労働者は男性の23%にのぼっているのに対して、女性ではわずかに6%を占めるのみである。これは、女性がもともと賃金の低い現場労働者として雇用されているという、採用時点から始まる賃金格差である。それにしても、1500タカという所得は、都市で生活するにはかなり厳しい額だといってよい。

表13から明らかのように、女性労働者自身が家計を支えているというケースは、女性全体のなかでは少数派である。約63%の女性の労働は、家計を補填するための副次的な収入源として位置づけられている。しかし、女性労働者の9割以上が以前なんら職業に就いていなかったことを考慮すると⁵⁹⁾、いかに賃金が低かろうと、縫製工場での就労が家計にプラスの貢献をしたであ

表13 世帯の主たる収入源

(%)

主たる収入源	男 性	女 性	全 体
本 人	62.1	36.9	48.8
父 親	21.2	22.9	22.1
配偶者	0.8	28.8	15.6
兄 弟	15.4	8.1	11.6
母 親	0.3	1.2	0.8
姉 妹	0.3	2.0	1.2
合 計	100.0	100.0	100.0

(出所) 表8に同じ。

表14 縫製工場での就労による社会的地位の変化

(単位：人，カッコ内%)

	男 性	女 性	全 体
Yes	261(71.7)	251(61.8)	512(66.5)
No	96(26.4)	131(32.3)	227(29.5)
無回答	7(1.9)	24(5.9)	31(4.0)
合 計	364(100.0)	406(100.0)	770(100.0)

(注) 「縫製工場での労働が自分の社会的な地位を向上させたか」という設問に対する回答者数とその割合。

(出所) 表8に同じ。

ろうことは間違いない。

そのことは、男性を含め、縫製工場の労働者のサンプル全員が、そこでの就労が世帯の経済的な地位を向上させたと答えていることから裏づけられる。

それでは、このような女性の経済的な貢献は、いったい女性自身の家庭あるいは社会における立場にどのような影響を与えたのであろうか。

縫製工場での就労が自分の社会的な地位を向上させたかという問いに対して、労働者全体では66.5%，男性の71.7%そして女性の61.8%が肯定的な回答を寄せた(表14)。こうした自己評価の根拠として、男性が最も多くあげたのが「就業した」という事実であるのに対し、女性の場合には「経済力が

ついた」という理由をあげている。「就業した」という回答は女性の間では男性の半分以下であった。この違いから推測できることは、職を得ることそのものが男性の評価につながるのに対し、女性の場合には就業自体よりもどのくらい収入を得ているかということが、社会的な地位を左右する重要な要因となっているらしいということである。すなわち女性に関しては、就業の事実よりも就業の中身が問題とされている。

しかし、全般的にいうならば、縫製工場での就労は女性の立場を大きく改善したといえる。未婚労働者のほとんどは、縫製工場での労働は結婚に対してプラスの影響を与えたと述べている。なぜなら、結婚に際しこれまで障害となっていた婚資の積立てに貢献しているからである。また、既婚女性のうち縫製工場での労働を通じて夫との関係が改善されたと答えたものの割合は、悪化したという回答を大きく上回った⁶⁹。

縫製工場で働く女性は、パルダをいかに考えているのだろうか。まず、女性労働者406人にパルダを守っているかと尋ねたところ、「はい」と答えたものは292人(71.9%)と、「いいえ」の回答者の数58人(14.3%)を大幅に上回った。パルダを守る理由として、半数以上が宗教で定められているからと答えている。一方、男性を含めた労働者全員(770人)に対して、縫製工場での労働はパルダに抵触するかと尋ねたところ、「いいえ」と答えたものが最も多く398人(51.7%)、次いで多かったのは279人(36.2%)の「わからない」という回答であった。はっきり「抵触する」と答えたものは93人で、全体の12%にとどまった。現実には、女性は戸外に出て男性に混じって働いているわけで、一見すると、「パルダに抵触しない」という見解にはうなずけないものがある。おそらく、これは、縫製工場に働く女性あるいは男性自身がそれぞれパルダをどう捉えているかということに由来するのであろう。

縫製工場での就労はパルダ違反ではない、と考える労働者があげたその根拠は次のようなものである。

表15に示されたとおり、パルダには違反していないと考える労働者のおよそ6割以上が労働とパルダを切り離して考えていることがわかる。以上のこ

表15 縫製工場における就労とパルダ

根 拠	回答者数(人)	比率(%)
仕事上ではパルダは問題とはならない	168	42.2
パルダは労働とは無関係	93	23.4
パルダよりも生活の方が重要	26	6.5
パルダは義務ではない	4	1.0
その他	107	26.8
合 計	398	100.0

(注) 縫製工場での労働はパルダに抵触しないと答えた労働者398人が指摘した理由。

(出所) 表8に同じ。

とから、縫製工場の労働者は、パルダに違反するけれども働かざるをえないという後ろめたさではなく、むしろ、就労とパルダは関係がないと合理的かつ積極的に自己規定している傾向がみてとれる。

そのことは、女性の就業をどう思うかという一般的な設問に対する回答でも、男性労働者の80%以上、女性労働者の90%が肯定的な回答をしていることから明らかである。肯定する理由としてあがったのは所得の上昇、経済的自立、個人の自由の増加、子供を増やさずにすむ、国家の開発に参加できる喜び、時間の有効利用などである。他方、否定の根拠としては、子供、家庭への影響、男性の就労機会の横取り、女性の過重負担、保護者に対して従順でなくなるなどといったことがある。注目したいのは、宗教あるいはパルダに抵触するといった価値観にふれた理由がなかったことである。

結 語

パルダに代表されるような社会的規範は、男は外、女は内という空間的な分離にともない、なすべき労働の範囲も決定してきた。すなわち男性は田で働き、女性は専ら家事労働、育児、家禽の世話などを分担するという分業体制が成立していたのである。この分業の境界はそのまま生産的活動に対する

再生産活動という区分に重なっている。

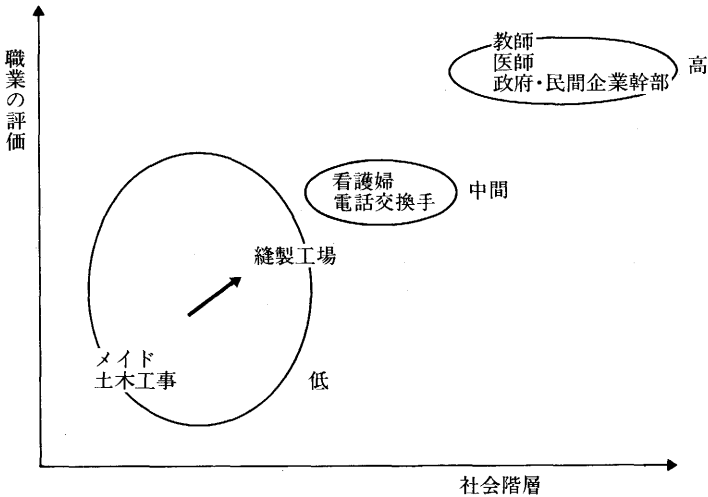
バングラデシュにおいては、独立以後、窮乏化あるいは労働力需要の増加という、2方面からの必要性によって、伝統的な分業体制が崩れつつある。そのことは、当該社会、とくに女性の社会的な地位にどのような影響を与えているのであろうか。西洋の経験に根ざすフェミニズム的な発想は、女性の生産活動への参加が女性の地位向上につながるということをほぼ自明の理として疑うことがなかった。しかし、このようなモデルは、バングラデシュの女性のケースに関しては必ずしもあてはまらなないと、カーンは1980年代初頭に行った農村における住み込み調査の結果から論じている⁶⁰⁾。貧困ゆえに女性は外に出て働くという、非伝統的な役割を担わされることになった。しかし、一方で、女性が内に隔離されることが、社会的に高く評価されるというイデオロギーは変化していない。言い換えれば、現実の女性が担う新たな役割に対して、それにふさわしい新しい社会的価値の設定は行われていないのである。したがって、就労は、世帯ならびに近隣の社会における女性の地位を向上させるどころか、むしろステータスの低下につながっている。

カーンの見解はおそらく、農村、都市両方において低所得階層の女性をとりまく状況を的確にいいあてていると思われる。就労による所得が女性の地位に直結しているのは、一定以上の社会階層の女性の場合である。皮肉なことに、最も深刻な貧困に直面している女性の場合は、就労がその社会的地位を高めるといふより、むしろ逆に低下させている。

裏を返していえば、個々の職業が社会階層を示す共通の価値基準となっているのである。職業と社会階層の関係を図に示せば図1のようになる。

図のなかで、縫製工場労働者は中間よりやや原点寄りに位置づけられる。出身階層からみれば、メイドや土木関係の労働者が属する階層とは大差がない。しかし安定的で、かつ相対的に高い所得によって、縫製労働者の経済的な地位が上昇し、それにともないその職業に対する評価も高まった。そのため、図のなかで縫製工場での就労は、他の職業の位置がほぼ固定化しているのに対して、唯一上昇のベクトルを示している。

図1 職業と社会階層の関係



(出所) 筆者作成。

女性の縫製工場での就労に対する社会の見方は、ここ10年の間に大きく変化した。縫製工場というのがまだ珍しかった10年前には、そこで働く女性たちは世間の目という荒波の前に、パイオニアとしての苦渋をなめざるをえなかったと思われる。しかし、今や彼女たちが、異端扱いされるようなことはなくなっている。また、彼女たち自身がそこでの就労を積極的に評価していることは、すでにみてきたとおりである。このような変化をもたらした最大の要因は、この10年間に縫製産業が飛躍的な成長をとげたことであろう。それによって、より多くの女性が雇用され、より多くの世帯がその恩恵を受けた。そのことは、縫製労働者をとりまく地縁、血縁関係のなかで羨望、嫉妬をかきたてた。嫉妬ゆえに、女性労働者を悪くいうものもないわけではないが、現在のところプラスの評価がそれを上回っているといえる。

無論、縫製工場の労働に問題がないわけではない。相当に安い賃金で、残業手当もないまま長時間の勤務を強いられている女性が大部分である。さらに、昼食や休憩をとるスペース、女性用のトイレを別に設けるといったこと

が考えられていない職場がほとんどである。また、夜間に及ぶ勤務の行き帰りの交通手段がないなどセキュリティ上の問題もある。さらに、家事と就労による女性の過重負担、また託児所がないために家に取り残される子供への影響も懸念される。

しかし、女性の就労をめぐる全般的な状況において縫製産業がもたらした変化は少なくない。そして、そこに働く女性自身が、触媒として、次の変化への連鎖を生み出す可能性は否定できないのである。

[注] —————

- (1) 子供の誕生時にはアザーン（祈りへの招き）が唱えられ、それがそのコミュニティへの新生児の受入れ承認の印となるが、多くは男子出生のみに限られる。Najimur Nur Begum, *Pay or Purdah: Women and Income Earning in Rural Bangladesh*, Dhaka: Winrock International Institute for Agricultural Development, Bangladesh Agricultural Research Council, 1988, p. 8.
- (2) *Human Development Report 1994*, New York: United Nations Development Programme, p. 138, Table 5.
- (3) Rafiqul Huda Chaudhury and Nilufer Raihan Ahmed, *Female Status in Bangladesh*, Dacca: Bangladesh Institute of Development Studies (BIDS), 1980, p. 47. また1974年センサスによれば、女子のドロップアウト率は70%にも及んだ。Salma Khan, *The Fifty Percent: Women in Development and Policy in Bangladesh*, Dhaka: University Press, 1988, p. 4.
- (4) Ministry of Finance, *Annual Budget 1994-95: Budget Speech of Finance Minister (Part I)*, 1994, p. 11.
- (5) 1991年国勢調査。
- (6) Chaudhury and Ahmed, *Female Status in Bangladesh*, p. 103.
- (7) 授乳期の母親の平均食物摂取量は、男性の1日当たりの平均1047グラムに対し、わずか874グラムにすぎなかった。Khan, *The Fifty Percent*..., p. 12.
- (8) バングラデシュの国語であるベンガル語では、「ポルダ」と発音されるが、南アジア一般では「バルダ」と呼ばれることが多く、既存の研究でも「バルダ」が使われているため、ここではそれに準じる。
- (9) 女性隔離を意味する言葉として「バルダ」が、他のイスラム地域で使われているかどうか、筆者の調べたかぎりでは例がなかった。バルダの語源はベルシャ語の *pardeh* だといわれるが、現在のイランで女性隔離の文脈では使われていない。
- (10) Begum, *Pay or Purdah*..., p. 11.

- (11) Chaudhury and Ahmed, *Female Status in Bangladesh*, pp. 5-8/コーラン第24-31節ならびに第4-34節。日本語訳は藤本勝次編『コーラン』中央公論社, 1979年を参照。
- (12) T. Hara, *Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures in Asia and Africa, 1991.
- (13) Fatima Mernissi, *Beyond the Veil: Male-Female Dynamics in Modern Muslim Society*, Bloomington: Indiana University Press, 1987 (First published in 1975), pp. 27-45, 137-147.
- (14) Uma Chakravarti, "Pativrata," *Seminar*, No. 318, Feb. 1986, pp. 17-21.
- (15) *Report on Labour Force Survey 1989*, Dhaka: Bangladesh Bureau of Statistics (BBS), 1992.
- (16) 女性のこうした労働での貢献は、様々な調査で「見えざる手」として強調されてきた。
- (17) 注(15)に同じ, Table 5.2より。
- (18) 同上, Table 5.5より。
- (19) 農村で雇用されている女性の87%が無報酬の家内労働である。
- (20) A. Farouk, *Time Use of Rural Women: A Six Village Survey on Bangladesh*, Dacca: Bureau of Economic Research, Dhaka University, 1980.
- (21) 別の村での調査でも女性の労働の内容はほとんど同じであった。Rushidan Islam Rahman, *The Wage Employment Market for Rural Women in Bangladesh*, Dhaka: Bangladesh Institute of Development Studies, 1986, p. 39.
- (22) 階層区分は以下のとおり。土地無し(0.99ビガ未満), 零細(1~5ビガ未満), 中規模(5~14ビガ未満), 富裕(14ビガ以上)。ビガは約3分の1エーカー。Zarina Rahman Khan, *Women, Work and Values: Contradictions in the Prevailing Notions and the Realities of Women's Lives in Rural Bangladesh*, Dhaka: Centre for Social Studies, 1992, pp. 90-91.
- (23) Rahman, *The Wage Employment*..., pp. 22-29.
- (24) *Ibid.*, pp. 44-47.
- (25) *Ibid.*, p. 55.
- (26) 女性労働者は平均で年間38日は1食で過ごしているというデータがある。*Ibid.*, p. 78.
- (27) 1992年現在の近隣諸国の都市化率は次のとおり。インド26%, パキスタン33%, スリランカ22%, ネパール12%。*World Development Report 1994*, Washington, D. C.: World Bank, p. 222, Table 31.
- (28) Mahmuda Islam, "Women at Work in Bangladesh: A Sample Survey of Working Women," in Women for Women Research and Study Group, *Women for Women: Bangladesh 1975*, Dacca: University Press, 1975.

- (29) Ibid., p. 95.
- (30) Nilufar Banu, *Some Socio-Economic Problems of the Educated Working Women of Dhaka City*, Dhaka: Bureau of Economic Research, University of Dhaka, 1988, p. 9.
- (31) Islam, "Women at Work...", p. 101.
- (32) ダッカ大学病院の看護婦に関する調査の結果によれば、農村の出身者はサンプル全体の56%を占めていた。また父親の職業で最も多かったのは農業で、全体の31%と、公務員、会社員などのサービス部門を上回った。これには、看護学校が寄宿舎を付設しており、親元を離れた女性にとって、住居の問題が解消されることが関係している。Bilquis A. Alam, "Women in Nursing: A Study of the Nurses of Dhaka Medical College Hospital," *Women for Women*, University Press, 1975, pp. 131-132.
- (33) Khaleda Salahuddin and Ishrat Shamim, *Women in Urban Informal Sector: Employment Pattern, Activity Types and Problems*, Dhaka: Women for Women, 1992, pp. 38-39.
- (34) Ibid., pp. 52-53.
- (35) Ibid., p. 43.
- (36) Ibid., p. 74.
- (37) Ibid., p. 45.
- (38) 高田峰夫「チッタゴンのリクシャワラー『ムラ』と『マチ』とを繋ぐもの―」(*『アジア経済』*第33巻第10号, 1992年10月) 77ページ。
- (39) *Statistical Yearbook of Bangladesh 1993*, BBS, p. 607.
- (40) Alam, "Women in Nursing...", pp. 122-123.
- (41) Ibid., p. 121.
- (42) Ibid., p. 138.
- (43) Banu, *Some Socio-Economic Problems...*, p. 28.
- (44) Sarah C. White, *Arguing with the Crocodile: Gender and Class in Bangladesh*, London: Zed Books, 1992, p. 22.
- (45) Khondoker B. Hoque, Mayumi Murayama and S. M. Mahfuzur Rahman, *Garment Industry in Bangladesh: Its Socio-Economic Implications*, Tokyo: Institute of Developing Economies, 1995. 以下のデータはとくに断らないかぎり、同調査に基づくものである。
- (46) 平均在職年数は2年(24.6カ月)であった。離職率の高さについては、制度的な保証がないため結婚、出産のため仕事を辞めざるをえないケースが多いこと、また縫製工場の設立が相次いだため、よりよい待遇を求めて別の縫製工場に転職するなどといった理由が指摘できる。
- (47) production manager, floor-in-charge, supervisor, inspector といった職名で呼ばれるもの。

- (48) *A Study of Female Garment Workers in Bangladesh*, Dhaka: Draft Report, Bangladesh Unnayan Parishad, 1990, pp. 51-52.
- (49) 別の調査では、縫製工場の女性労働者の夫の職業として、全体の34%がサービス部門のホワイトカラーで最も多く、次いで縫製工場21%, 小売り業17%, 人力車・バス・タクシー運転手が11%となっている。*A Study of...*, p. 56.
- (50) 高田の定義によれば、「メス」とは数人から数十人が同一の居住空間を分け合い、寝食を共にして暮らすタイプのスラムの総称である。高田峰夫「『メス』の生活—チッタゴンのスラムの人々(2)—」(『広島修大論集』第34巻第2号, 1994年3月) 157ページ。
- (51) やや古いデータだが、1981年国勢調査によれば、都市においては、光源として電気を使っている世帯が44.34%, また燃料としてガスを使用している世帯は全体の11.71%であった。また水道ならびに井戸水から飲料水を確保している世帯は都市では全体の80.3%であった。*Statistical Yearbook of Bangladesh 1993*, pp. 79-81, Table 2.55, 2.60.
- (52) 労働者個人の収入でなく、労働者がそれぞれ帰属する世帯の収入総額であることに注意。
- (53) 1988/89年度時点で都市世帯の平均月収は4228.53タカであった。*Statistical Yearbook of Bangladesh 1993*, p. 656, Table 14.17.
- (54) *Ibid.*, p. 657, Table 14.18.
- (55) 1985/86年度の調査であるが、製造業で働く女性労働者のうち最も多かったのが世帯の月収が500タカから1000タカのグループであったのに対して、男性労働者の場合には1001から1500タカのグループが最も多かった。Hameeda Hossain, Roushan Jahan and Salma Sobhan, *No Better Option? Industrial Women Workers in Bangladesh*, University Press, 1990, p. 54.
- (56) 大きな違いはインフォーマル・セクターで働く女性の場合には、未婚者が少ないことである。
- (57) 第2節であげたダッカのスラムの女性労働者の調査では、縫製工場で働いていたのは10%以下で、彼女たちは幸運にもフォーマル・セクターで雇用を確保できた一握りの者たちであった。Salahuddin and Shamin, *Women in Urban...*, p. 38.
- (58) 職歴を有していたものは女性労働者の7.5%のみ。就労以前の前歴として多かったのは主婦(49.0%)および学生(24.2%)。
- (59) 既婚女性198人の回答の内訳は次のとおり。改善(26.8%), 悪化(8.6%), 変化無し(51.0%), 無回答(13.6%)。
- (60) Khan, *Women, Work and Values...*, pp. 178-199